

沖

11

2015

創刊45周年記念号

俳句雑誌[お色]



さらなる目標へ

能村 研三

「沖」は本年十月、創刊四十五周年を迎えた。「四十五」という数字に拘ると、「沖」が創刊されたのが昭和四十五年（一九七〇）であるので、何か不思議な縁を感じる。四十五年を時代別に分けると、昭和の世に十八年、平成の世に二十七年、二十世紀の世に三十年、二十一世紀の世に十五年ということになる。いずれにせよ、沖は昭和、平成、加えて二十世紀、二十一世紀を貫き誌齢を重ねてきた。先師登四郎が三十年半、そして私が主宰を引き継いで十四年半になろうとしている。創刊号は投句者八十八名で出発したが、この四十五年を創刊以来句歴を共にされた方は鈴木良戈、河口仁志、渕上千津、藤庶照子、湯橋喜美、五氏で今も尚毎月欠かさず投句をいただいていることは大変嬉しいことである。しかし四十五年の歴史の中では、「沖」を支えてくれた多くの方が鬼籍に入られてしまった。最近では、先師の訾咳に触れていない方も多くなり、私が主宰を継承してからの会員同人が半数を越えたようにも思う。先師、先輩諸氏が築いてくれた「沖」の重厚な重みをしっかりと受け止めなければいけない。

四十五周年の記念事業は三年前に立ち上げた『沖季語別選句集』の編纂事業から始まった。刊行委員長の千田敬さんが持ち前の編集力を駆使して、他の編集スタッフと共にすばらしい選句集を作りに上げて下さった。

今回は本十一月号を四十五周年記念号としたが、本号だけが特集号となるようにするのはなく、

通常よりページを増やし一年間を通した記念特集を組んだ。まず、一月号から七月号まで「沖支部の四季」と題して各支部から地方独特の地貌季語を紹介するページを設けた。また従来、記念コンクールの中に論文部門があつたが、今回はこれに代わつて昨年十月号から十回連載で「写生と新しさ」をテーマに十人の論客に、それぞれの論を展開していただいた。

一月号より「沖」誌の顔となる表紙絵を池田蘭径先生の水墨画により一新、誌面レイアウトも一部変更したことも変革である。

私は昨年に完全退職をして二年目となり、俳句に専念できることを喜んでいる。以前は私に代わつて主要同人に地方支部の句会の指導をお願いしていたものを、私が直接出向くことにした。各支部の行脚も兼ねて、これまでに関東大会、中部大会そしてアメリカのサンディエゴを皮切りに、山形、新潟、大分、玄界の各支部にお伺いした。浅草での記念大会にお出でになれない、地方の会員の方々とも親しくお話できた。この大会終了後も南信濃、館山の各支部の指導句会、九州大会等が予定されている。

また、長年の懸案であつた本来の仕事に着手することができた。昨年暮れに俳人協会の「自註句集」を、本年六月には五年ぶりに第七句集となる『催花の雷』を刊行し、この十月には初めての随筆集『飛鷹抄』を刊行した。


今年になつてから俳人協会の理事、さらには千葉県俳句作家協会の会長にそれぞれ就任した。いずれも責任のある立場の仕事なので、しっかりと全うしたいと思つている。

あと五年後の二〇二〇年は東京でオリンピックが開かれる年であるが、この年の十月が「沖」の創刊五十周年と六百号が重なる。創刊の理念である「伝統と新しさ」を引き継ぎ、さらには登四郎美学を守りながら、「沖ルネッサンス」を掲げ、「沖」の句友と句座を共にしながら、次の目標に向かって精進していきたい。

沖45周年記念作品

飛鷹の空

能村 研三



濤声を呼ぶ大鷹の渡りかな
波の穂に宝珠を咲かす月明り
秋澄みて序奏は低き習ひ笛
白萩かうねりにまかせ身を隠す
寥寥と照らし魯田日和かな



回想の起点としたり赤とんぼ
風倒田刈る間隙を見つけをり
被り咲く萩を零して築地塀
置き鍵の秘密は絆花茗荷
櫛は実に色づくための風貯めて



見番の跡地雨中の実紫

山襷の折目は深し合歡は実に

指で切る封書一通十三夜

身のどこか眠れずにゐる遠添水

秋澄むや奢る灯連ね深夜景



三つ栗の押し合ひ圧し合ひ楽しけれ

ふつふつと師の句にまみゆ秋扇

胸波に身を浮かしゆく芒原

葉騒ぎの朴の木仰ぎ秋惜しむ

孤高なる飛鷹の空は高貴なり

蒼茫集



濫觴

大畑善昭

恐竜の飛び出す映画敗戦忌
声あらば大合唱団曼珠沙華

薔薇白し

千田百里

天高し祝 沖創刊四十五周年濫觴の白を今に継ぎ

雨の日は雨にも喜色曼珠沙華
萩の影障子に揺れてゐる日和
けむり茸けむりし穴に人の声
賢治の忌どの山も目の限り澄み
飛んで来し球に継子の尻拭ひ

土砂降り

上谷昌憲

土砂降りに咲く朝顔のありにけり
序破急を正しく朝の法師蟬
賜高音天国なんぞ行くものか
稲の花咲く屋上の一枚田

沖・四十五周年の主宰へ

秋麗の滑翔一位彫の鷹

男坂登る素風につかまりて
飛び退くといふ技の失せ秋の浜
天高し捨て値で買はれゆく愛書
秋うらら古着屋に四季溢れゐて
さばさばと年取り秋の薔薇白し

いわし雲

河口仁志

一穢なき天上の紺曼珠沙華
伏せるとは祈りに似たる敗荷

さり気なき老々介護爽やかに
食うて寝て見ざる聞かざる生身魂
一葉落ち刻の流れの早さかな
いわし雲天に潮騒あるごとし

どの道

藤原照子

菓子袋膨るる気圧秋の峰
新涼や遺品のペンの手になじみ
今朝秋や楷書思考のやや戻り
この先のことは目つむり墓洗ふ
牧場の柵の内外なく花野
山頂の爽気どの道下らうか

傷一つ

安居正浩

改札にスイカぴたりと厄日前
白桃にうす紅の傷一つ
鬼灯の灯り父母ある気配
コスモスの揺れを遠目に意志通す

白粉の夕方ですよ出番です
やはらかな風よりやさし蕎麦の花

手を振る人

辻美奈子

鳥渡る空の潮目に舵を切り
なかぞらへ地軸のばせば虹二重
帰省列車手を振る人のあるやうに
桔梗のひらけば急にお喋りな
底紅やわたしを嫌ふ私の子
前髪を気にして終はる夏休

心耳

秋葉雅治

残暑でも初涼でもなくうつたうし
連休の狭に埋没敬老日
足萎えの妻が代参秋彼岸
蛇笏忌の心耳を澄ます夜の驟雨
板塀の落書つるべ落しかな
耿耿と関東平野焚火見ず

町の匂 楠原幹子

新涼のバス停なんとなく会釈
コントラバスの韻きすなはち秋の声
白芙蓉生き急ぐかに咲き継げり
秋澄めり町の匂といふがあり
きつぱりと俳句的なり曼珠沙華
今日の月酔歩に眩しすぎたるよ

白 濤 林昭太郎

絶えさうで絶えぬこの径草いきれ
風鈴を鳴らさぬ嵐鳴らす風
曼珠沙華咲きだす頃の空の色
小鳥来る改行多き詩を読めば
捨て印ににじむ油も厄日前
月光に海は百濤もて応ふ

白き紙 吉田政江

盆東風や田面の波の色返し
あたり前のやう白き紙欲り終戦日

黙し来て帰る仏や盆の月
鳴く虫を聴き分くひとつふたつまで
真間川の昔の幅やぬのこづち
風ぐるみコスモスの束抱へけり
一転して 千田 敬

鯉に髭われも顎髭秋の暮
鳩吹くや故山の影に月日あり
退いて知るこころの平和星月夜
退院や朝顔の紺あせぬ間に
一転して秋晴れ電話けたたまし
帰る海猫の気概の飛翔三番瀬
パッチワーク 菅谷たけし

八万石のパッチワークや早稲晩稲
死者よりも生者に廻る盆燈籠
数珠玉や触るれば零る色となり
延壽寺に墓を洗へる女弟子
刈り残る晩稲へ風の集まれり
米倉に米の満ち充つ星月夜

余所者 森岡正作

石庭の箒目にある虫の声
法螺貝に霧襖解く山の神
余所者の一步に峽の威銃
大鮎の錆びて水の香失へり
漁火の一つ遠のく秋思かな
一端いっぽしの故郷納税小鳥来る

窮 屈 久染康子

群れ咲いて根元さびしき曼珠沙華
けもの道秋の七草隠れかな
息かけて落蟬幹に戻しけり
火付け紙軽く振つて菊を焚く
秋徽雨叩いて開ける小抽出し
満月の窮屈さうなビルの間

窯の煙 荒井千佐代

水中花たれも居ぬとき息吐きぬ
聖水盤乾き絵硝子より秋日
良夜のミサ若き神父が手話まじへ

横顔にきかんきの見ゆ夕月夜
稲穂波大きくなれば海荒るる
稲刈られ窯の煙のまつすぐに
ばつたんこ 宮内とし子

一徹に一音守りばつたんこ
身に入むやこんな狭き江戸長屋
千両箱の重さに負ける厄日前
露けしや火消しの衣に江戸の粹
山影を動かしてある秋桜
シンバルは勝利の一打月今宵
夕 影 松井志津子

黒潮と親潮の合ふ辻踊
終戦でなく敗戦と生身魂
断崖は地層の素肌鳥渡る
現在地探す案内図小鳥来る
この秋思色ありとせば貝の裏
秋耕の夕影使ひ果すまで

鬼のかんざし

渡部節郎

夾竹桃鬼のかんざししかも知れぬ
全山を唸らせてをり蟬時雨
むらさきを粧にあしらひ杜鵑草
滴りて滴りて岩砕くかな
花だけを咲かすに一途曼珠沙華
磨る墨に硯吸ひつく白露かな

宇宙の界

小松誠一

彫深き波の欄間や涼新た
新涼や朝刊に風折り込まれ
稜線は宇宙の界星月夜
仕来りを変ふる勇氣や蚯蚓鳴く
恥ぢらひの色して萩の乱れやう
引込み線のレールの錆や月見草

笑窪

田所節子

罅割れの夜空にあまた罅雲
アイロンの蒸気を効かす白露かな
ビルはみな雲にかくる厄日かな

割石榴地球何かが狂ひをり
笑窪めく水輪つぎつぎ泉湧く
水が水押す噴水の力かな

ホバリング

細川洋子

冷まじや救援へりのホバリング
草の根の金剛力や初嵐
秋冷を五指に分かちて意を決す
咲き競ふほどに哀しき曼珠沙華
竜淵に潜む渚のランプ宿
スワンネックの形なまに夜長のランプかな

山の湯

岡部玄治

降り出して稲穂のみどり新しき
もの干しに運動靴も萩さかり
台風のさなか餃子に酢を効かす
どんぐりの転がり風がすこし押す
人肌の恋し夜長のの日本酒も
山の湯にさざなみ芒傷ひたす

潮鳴集



銀河 峰崎成規

銀河より一滴こぼれ水の星
星のごと銀河をよぎる着陸燈
月早し彫りに雨持つ芭蕉俳碑
稲妻の一閃欲しき半跏思惟
ハープ橋釣瓶落しにぼろろんと

風 豊 佐久間由子

海鳴りのはるか八月十五日
遠花火記憶の端をつなぎけり
新涼や白帆一つの風豊
森の風光りとなりて銀やんま
爽やかや雲ついて来る岬道

夢の入り口 栗原公子

残暑なほ伏せ置かれあるミステリー
秋めくや人見送りし夜の駅
落ちてゆく夢の入り口鉦叩
約束はいつもそのうち合歡の花
夫あればこそ炊きたての今年米

星 降る 多田ユリ子

ささめきのやうに星降る稲の花
かなかなや生家に旅の荷をおろす
何すると無き手を洗ふ厄日かな
棟梁の墨壺匂ふ初月夜
爽涼のぱりつと決まるシャツの衿

沖作品



能村研三選

一行の詩にある宇宙桐一葉

市川

本池美佐子

鳥渡る生くる力の翼もて

空蟬やいのちのままに脱がれぬて

城山を丸ごと抱へ蟬しぐれ

風の色かすかに変はる花野かな

露坐仏に地震の記憶や白芙蓉

秋めくや岩肌白き島祠

青八ヶ岳の優しく角の取れにけり

梅花藻の水磷磷と道祖神

一列の蟻にも序列あるごとし

絵馬の色褪せて成就や夏大根

蟬しぐれ浴びて大地の呼吸とも

かなかなやびしりと一手と金置く

流燈や「イマジ」の声透きとほり

晩夏光秘色を酌みて神谷バー

神奈川

小林 和世

市川

藤代 康明

喪に服す国にて八月十五日

読みさしの本に鉛筆夜の秋

新涼の夜景銀座はあのおたり

塩地蔵にたのむ一病竹の春

秋澄むや博物館の中は江戸

賓頭廬の手足を摩る涼新た

水蜜桃選ぶ手加減ひとつづつ

素揚げする尚澄み切つて茄子の紺

口中の落雁ほると今朝の秋

残照の高さに蜻蛉の羽光る

カーブせし列車の向かう雲の峰

炎昼の道は無音に続きをり

炎天下大樹といふは閑かなり

雲の峰海に真向かふ大鳥居

夕立去り孔雀は羽根を開きをり

千葉

岡 真紗子

木村 美翠

竹内タカミ

沖作品 15句選評

*
能村研三

空蟬やいのちのままに脱がれぬて 本池美佐子

蟬の一生は地中で七年、地上に出てからは一週間位しか生きられない。羽化する時、背中が割れて青白い蟬が背を丸めて姿を現し、やがて殻から頭や手足を抜いて成虫になる。地上で生きていけるうちは、けたたましく鳴き続けるものの、そのいのちの短さを思うとどうしても感傷的な思いにかられてしまう。私がかつて〈空蟬の縋るかたちにいのち見ゆ〉という句を作ったことがあるが、その抜け殻には、いのちそのものがそのまま抜け出した感じで、正にいのちと引き換えた空蟬は、いつまでもそのかたちを残しているのが憐れである。

露座仏に地震の記憶や白芙蓉 小林 和世

ここで詠まれた露座仏は、作者が小林和世さんであるから鎌倉の大仏であろう。大正時代に起きた関東大震災は、鎌倉の町にも大きな被害をもたらし、多くの死者や倒壊家屋があったと

伝えられている。それに津波の被害もあったそう。五百年前に起きた津波では大仏殿も倒壊したそうだが、関東大震災では台座が三十五センチ程動いただけで倒壊は免れた。昔の人の知恵と工夫により免震的な処置が施され、大仏は台座の上を滑るように動いて倒壊を免れたそう。大仏にとってもそんな記憶は随分昔の話になってしまったが、傍らに咲く白芙蓉が風に吹かれながら大仏を静かに見守っていた。

蟬しぐれ浴びて大地の呼吸とも 藤代 康明

富沢赤黄男の句に〈大地いましづかに揺れよ油蟬〉という句がある。本池さんの句でも述べたが、蟬は地上で生きる事は僅かしか許されない。それが故に大地だけたたましく鳴き大きな存在感を示す。蟬が鳴くのは異性への求愛だそうだが、限られた時間を精一杯大地の上で呼吸しているのだ。

喪に服す 国にて 八月十五日 岡 真紗子

今年には戦後七十年という大きな節目の年でもあったので、あらためて終戦、敗戦という言葉の意味の重さを考えさせられた。八月十五日を俳句の季語としては「敗戦忌」「終戦忌」と言っているが、この日に限って多くの人が亡くなったから忌日としている訳ではない。多くの人たちが戦争で亡くなったことを追悼する意味でこの日は喪に服す日としている。綾部仁喜の句に〈いつまでもいつも八月十五日〉という句がある。〈以下略〉